京都特別集会 聖霊降臨節（三高会館にて）

聖霊と聖言

――使徒行伝第6、8章他――

１９７０年５月30日
小池辰雄

霊的な実体　霊言一如　ピリポのサマリヤ伝道　福音と御利益宗教の違い　ピリポと闇人　十字架と聖霊　罪の赦しのバプテスマ　見えないものを見ている　聖霊の人　血染めの聖教　人を救わんがために救われている　神の霊の響き

【使徒行伝6】

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと御言に事うることとを務めん』5集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。……

【使徒行伝8】

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。2敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大に胸打てり。3サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出して獄に付せり。

4ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を伝う。6群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。7これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに因る。8この故にその町に大なる歓喜おこれり。

9ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を

驚かして自ら大なる者と称えたり。10小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。12然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。13シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。

14エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。17ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。18使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、19『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』20ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』

25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視

よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障(さわ)りかある』 37（なし） 38 **乃(すなわ)ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。** 39 **彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。** 40 **かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣べ伝えつつカイザリヤに到れり。**

●霊的な実体

あなた方はこの集会に来たら、どんな気持でいるかな。内村先生が

「一日一生」

と言いました。

「一集会全生命」

です。この一つの集会に全生命をかける。使徒たちを見ていると分かる。もう使徒たちの他は見る必要はないですね。それから、キリスト教の歴史で本当に使徒のあとを生命をかけて行った人たち。学者の言うことなんかあまり気にしなくていいから。

今日の題は「聖霊と聖言」という。ヨハネ伝第1章第1節に、

「1 **太初(はじめ)に言葉(ことば)あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**

とある。イエス・キリストはこの「言(ことば)」である。「言」なんて訳してみたって、これはしょうがない。「ロゴス」なんていう言葉を使ったって、「ロゴス」がなにか特別な言葉でも何でもない。アレクサンドリアのフィロンという学者の「ロゴス」という言葉をちょっと拝借して持ってきただけです。この「言」という表現の奥に――ヘブライ語でいうと「ダーバール」という――「ダーバール」という字は日本語と同じで、「言(こと)」は「事(こと)」に通ずる。「言」が即ち、「事柄、事実」である。

「初めに言葉(ことば)あり」

というのは、

「初めに実体あり」

でいいわけです。その実体は目に見えるような実体ではない。本当の実体、霊的なものです。霊的な実体がこの「言」です。だから、私は「霊言」と言う。霊と言が一つになってしまう。

「初めに霊言あり」

と。あるいは「言霊(ことだま)」と言ってもいい。もともと、これは分かつべからざるものです。言と行、これも分かつべからざるもの。「初めに霊言あり」と。即ち、言にして実体であるところのもの、霊言があった。

2 **この言は太初に神とともにあり、**

この霊言は、言うまでもなく、神とともにあった。霊言そのものが神的なものである。この霊言は本当に神と通じているわけです。そういう一如の事態。正にこれはもう既にミス

テリオンです。神秘の世界です。

大体、この聖書というものをいわゆる学問や、科学的な即ち知的な認識でこれを見ようとすることは、もう第一歩がまちがいです。そういう意味において、聖書の皆さんの読み方は、魂（たましい）をもってこれを読まなくてはいかん。魂で読む。私たちの賜りたるところの、この魂でこれにぶつかっていく。

「神とともにあり」と言ったって、これはわからんですよ、神さまは全然。仕方がないから、これはしばらくお預けにしておけばいい。

3 **万（よろず）の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。**4 **之に生命（いのち）あり、この生命は人の光なりき。**」（ヨハネ1・1～4）

と。これは生命です。それから、これは光である。まぁなんという展開の仕方かと思って、もう始めのここのところを見て驚くわけです。

●霊言一如

その霊言が即ちイエスである。そのキリストが、

「わが言は霊なり生命なり」

と、ちゃんとそのあとでそのまま仰っている。ヨハネ伝6章に出てくる。63節に、

「63 **活（いか）すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。**」（ヨハネ6・63）

とある。これも霊言一如です。だから、我々の生命というのは、この霊的なものである。もうはっきりしている。我々自身が本来、霊的なものなんです。人間は万物の霊長である。その意味において、「精神」なんて言っているうちはダメなんだ、よく

「精神、精神」

と言うけれども。「精神」でもわるくはないけれども、――あの「精神」という文字そのものは素晴らしい字なんだけれども――もうすっかり観念化してしまっている。

人間は本来、本質が霊的なものです。20世紀の全体のものの考え方、知的であり物的であるようなものとは正反対の逆行です。もう人類は没落してしまう。人類の文明文化というものは、もう没落に向かっている。

「末の世に信を見んや」

という。やがて、最後の大カタストローフが来て滅びてしまう。地球はだんだん冷たくなってきて、そのうち大氷河時代がきてみんな凍ってしまったら、公平でいいよね。そのときに凍らないものがある。

そういうようなわけで、霊言はもの凄い生命である。これはいかなるものもこれを阻害することのできないところの神の生命である。これは何だかしらないけれども、そういうものと自分の魂が交通を始めてきたらば、もう本当に文句なしです。

どうぞ、皆さんはまだ若いのだから――あなた方はまだ私の年齢までは大体、30年、40年あるんだから――大変なことになる。遠慮しないでくださいよ、どしどしやっていかなくては。

「ああ、なるほど、聖書はまだ呻き叫んでいるんだな。表現しきれないで困っているんだな」

ということが分かってくる。

「意味がどうだこうだ」

なんて詮索しているのはもうてんで見当違いだ。

この光、生命であるものが実はナザレのイエスに現れたという。このイエスというひとにでっくわしたらもういい。霊にして、言にして、生命にして、光なるものが、これが即ちイエスである。霊と言おうが、言と言おうが、言も霊も生命も光も全部これがイエスの内容です。だからもう、

「来(きた)れ！　来てごらん」

と言って、あのサマリヤの女みたいに、福音に導く。自分自身に、

「さぁ、また福音書の中に入りましょう。キリストという無限定の実体にぶつかりましょう。そして、その光を、その生命を、その言を、その霊を浸透させていただきましょう」

と言う。なにかもう本当に簡単な、しかも実に分かつことのできない世界が――そしてその中に入ってみると――無限無量であることがだんだんわかってきます。そうすると、「何々思想全集」なんていっておどかすけれども、あんなものは何でもない（笑）。こっちが逆にみんな掴(つか)まえてしまう。あなた方はすべて楽しく読めるよ。そして、ちゃんとこちらの方がもうひとつ上の次元から読むことになるから。ひとつも驚くものはないですよ、本当に。

霊界のキリストが地上における具体的な肉となって現れた。この霊肉渾然(こんぜん)たるところのものがこのイエスです。それが今度は、この肉が本当に霊化してしまってもの凄い実体となって、天界に、霊界に今ありたもうところのものが活けるキリストです。そして、私たちの実体をそのような復活体のキリストと同質なものに救いあげていく。これがパウロがコリント前書15章でもの凄く語っているところの事態であります。パウロというやつは本当に捕まえられた。

「聖霊と聖言(みたまとみことば)」

なんて難しいことでも何でもない。イエスという方にやってくると、「聖霊と聖言」は、

「我が言は霊なり生命なり」

でもって完全に一つになっているから、このイエスという神の言そのものであり、神の行為そのものであり、神の霊そのものであるところの事態に来ると、

「なるほど、こんな言が発してくるし、こんな行為が展開してくるんだな。本当に

神さまはここに現れた」

ということがもう文句なしに分かってくる。これは聖人でも君子でも何でもない。神の実証体ですから。キリストは神を本当に証したひとです。この神の証人なるキリストの中に入っていけば、私たちも証人に――

「ならざらんと欲すといえどもあたわず」

というわけで――必ず成らざるをえないという、「ざるを得ない」世界が展開していく。あなた方は――「証者となれ」なんて命令でも何でもない――

「先生、証者とならざるをえませんよ」

と、はっきりそう答えられていくわけです。

●ピリポのサマリヤ伝道

今度は、使徒行伝に入っていきます。使徒行伝6章、

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、2ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。

とにかく、信者はやもめの人に食事をちゃんと分配しなくてはいかんというわけですよ、具体的に。

3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、

「智慧」というのは神さまの智慧です。

それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと御言に事うることとを務めん』

「専ら」と書いてある。

「専ら祈りが土台でござるぞ」

というわけです。

「御言に事える」

とはもちろん伝道です。祈りのないところに伝道なんかありえない。祈りは我々の実存の土台です。

「祈りとはこのキリストに結び付くこと」

であります。

この霊言は、霊にして言にして行である。キリストという霊的人物は、言に発すれば霊言となり、それが手足に発すれば霊行となるだけのはなしです。発し方が違うだけで、言も行も同じことだ。

「言うは易く、行うは難し」
なんてことではない。言うも行うも一つです。みんなこの霊人から発する。これが福音書の事態です。非常に楽なんです。キリストの言と行はぴたり一つですから。言ったことがまた直ちに現象してくるという、これはズレのない世界です。これがなかったら、
「さぁ、言われたことを行いましょう。言ったことを行わなくてはならない」
なんていうのは全然、的外れのはなしです。

霊は生命とも言う、光とも言う。この霊はもちろん聖霊だから。生命はどんな生命かというと、もの凄い愛の生命である。そういうキリストの愛は最強のものです。人間が一番求めているものは愛なんです。生命はただ時間的に長いものがただ生命ではない。生命の一番根源の質は愛である。人を生かすものは愛なんです。

5 集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6 使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。

ステパノは第一の殉教者ですが、その次に出てきたピリポという、ちょっと不思議なのがいます。このピリポに今日はぶつかろうと思う。そこで今度は、使徒行伝８章にくるわけです。４節に、

4 ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5 ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を伝う。6 群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて
「謹みて」と言うよりもむしろ、「心ひかれて」ということ。
其の語る事どもを聴けり。7 これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、
なかなか妙なのがたくさんいたとみえるね。
また中風の者と跛者と多く医されたるに因る。8 この故にその町に大なる歓喜おこれり。
即ち、サマリヤ人がこのピリポのサマリヤ伝道によって救われていったわけです。実力を持っているから。

9 ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大なる者と称えたり。
「自ら大なる者と称える」なんていうのは怪しい。これはサタン的なんだ。

10 小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。
だいぶ評判になっていた。

11**かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。**

霊的な人物は、とにかく働きをするからね。現象は同じであっても、質の違うやつがあるから困る。まやかされないように。この霊の世界はまたこれが実に悪いことをするからね。それで困るんだ。

●福音と御利益宗教の違い

マタイ伝7章に恐ろしいことが書いてある。21節、

「21**我に対(むか)いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意(みこころ)をおこなう者のみ、之に入るべし。**

「ことごとくは入らず」と言っても、本当に「主よ」と言ってかかってくる者は、それは入りますよ。けれども、空念仏の「主よ、主よ」なんてものはダメだと。

よく、祈りの中で、「お父さま」だとか、「神さま」だとか、「主よ」だとかを祈りの言葉の間にちょっと継ぎ目に入れる人がある。あんな祈り方をしてはいかん。たくさん入れる人がある。継ぎ目に呼ばれたってダメですよ。よくそういう癖の人があるが、あれは改めた方がいい。本当に「主よ」とか「お父さま」とか呼ぶ時には、そこに非常な力がかかってくるから。言葉の合間に「えーと」とかとよく言う人があるでしょ。その代わりに「主よ」とか「神さま」とか「お父さま」とか入れる人があるが、そういう軽々しい祈りはしないようにしてください。

22**その日おおくの者、われに対(むか)いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力(ちから)ある業(わざ)を為(な)しにあらずや」と言わん。**

そういうことを言うやつがあるけれども、

23**その時われ明白(あらわ)に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。」（マタイ7・21～23）**

御名を借りても力を現して、業をやるですよ。同じように呼んでいても、自我中心であって、魔術的に――言葉には魔力があるから――魔術的にやっている人とは違う。それで力を現したって、そんなことで、

「私はこんなに人を癒したではありませんか。こんな不思議な業をしたではありませんか」

と言っても、

「知らないぞ」

とキリストは言われる。ここが本当に質の相違で、平伏して栄光をキリストに帰しているか、何か霊力を私してやっているか。これは大違いであります。世の中には妙な宗教がありますから。福音の世界は、絶対にキリストの十字架が立っていなければダメなんです。この

シモンというやつはそうじゃないんですよ。

12 **然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就(つ)きて宣伝(のべつた)うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。**

「御名につきて」という訳は、本当は、

「御名に在って」

ということ。

「御名を宣べ伝える」

と言った方がなおいいかもしれません。「につきて」という言葉がありましても、本当の気持は、

「神の国とイエス・キリストの御名を宣べ伝える」

ということ。いや実に、神の国の中から、イエス・キリストの御名の中から、御名に在って宣べ伝える。今は福音について語る人はたくさんいるよ。けれども、「について」語っている世界はいわゆるお説教であります。その中からものを言っているか。私たちの魂は、もう説明の世界ではダメなんです。そこに本ものが発してこなければ、描かれたるお月さんではどうにもならない。池が空にかかる月の影を宿すように、月の影を自分の中に宿すような見方をしていなければ。いつか

「田毎(たごと)の月」

という文章を書いたでしょ。あの通りです。宿す世界です。だから、私は本当の絵描きの境地もそこにこなかったら本当の絵が書けないと思う。その絵を見ている人が、何かそれをひとつのきっかけにして、その実体が自分の中に宿ってくるような迫力を持った絵でなければね。

13 **シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕(とも)に居り、その行う徴(しるし)と、大なる能力(ちから)とを見て驚けり。**

「ひとつ俺もああいうようになりたいな」

なんてやったわけです。とうとう、シモンのやつは金を持ってきて、

「その能力をください」

なんて言い出した。聖なるものを金で取ろうとする者を「シモニア」という。これはダンテが地獄の中に入れてしまった。そういうことがその後に書いてある。

このピリポとシモン、これが真の宗教の福音と、それから御利益宗教とのはっきりした対照となっている。この使徒行伝8章をみると、福音はこのピリポの方にあって、いわゆる御利益宗教式な角度のものはシモンの方ですから。日本にはたくさんいるんだ、このシモン的なものでワッショイ、ワッショイとみんな大勢集めているのが。そういう低級なんだね、日本人のある角度は。そうすると、片一方では今度は宗教をすっかり敬遠してしまって、ただ唯物的な思想でやっている。もう右にもあらず、左にもあらずで、本当の上から

臨んでくるところのこの真道を私たちは行かしめられているわけです。

●ピリポと閹人

それで、26節から始まります。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かい
サマリヤから南の方へ行けと言うんです。サマリヤを通って北の方へ行こうと思ったら、方向転換せよと言う。これは御使が来たですよ、パウロと同じように。このピリポというのはステパノの次の大事な人物です。ステパノ、ピリポ、パウロときているわけだ。
エルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、

ピリポは示された通りに行きました。

視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。

イザヤ書というのはやはり非常に重んじられていたとみえる。イザヤ書の写本もこないだ見つかったくらいだからね。

29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』

本当にピリポは聖霊の人であります。天使に示されましたから、今度は何が示されるかと思って、祈りつついたわけだ。そしたら、御霊がピリポに言った。これは本当に不思議なことですね。

30ピリポ走り寄りて、

「走り寄り」と書いてある。実に目に見るがごときドラマチックなシーンであります。

その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』

分かるかねと。

31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』

導者がいなくて、どうも困っているわけですがと。

而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

これはギリシア語の七十人訳から来ているので、原文は、ご承知のとおり、イザヤ書53章です。いわゆる

「ヤーヴェーの僕」「エベット・ヤーヴェー」

という「エホバの僕」という歌がある。その第四番目がイザヤ書52章13節から53章の終り

までです。

「13視よ、わがしもべ智慧をもておこなわん。上がりのぼりて甚だたかくならん。14さきにはおおくの人かれを見ておどろきたり。その面貌はそこなわれて人と異なり、その形容はおとろえて人の子とことなれり。15後には彼おおくの国民にそそがん。王たち彼によりて口をつぐまん。そはかれら未だつたえられざることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

1われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2かれは主のまえに芽えのごとく、燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艶色なし。3かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。

4まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり。6われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

7彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、屠場にひかるる羔羊の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8かれは虐待と審判とによりて取去られたり。その代の人のうち誰か彼が活けるものの地より絶れしことを思いたりしや。彼は民のとがの為にうたれしなり。」（イザヤ52・13～53・8）

そういう、本当に虐げられ迫害され誤解され、そして忘れ去られる。しかし、その人はみんなの罪咎、悩み苦しみを全部、自分で負った人である。なんと不思議な文字だろうか。誰の手がこんな文字を書いたのだろう。このイザヤ書を――いわゆる40章からの「偉大なる知られざる人」というこの無名の預言者――この驚くべき音信を書かしめられているところの人は、確かに自ら十字架を負わしめられているところの人であったに相違ない。その体験から示されたところの言葉であるに相違ない。これが大きな不思議な預言者となって、それから五百年あとに現れてくるところのキリストを指し示しているわけです。ナザレのイエス自身がイザヤ書をどんなに愛読されたか。一番愛読されたのはおそらくイザヤ書と詩篇だと思います。

●十字架と聖霊

闇人はたまたま、このイザヤ書53章のところを読んでいた。不思議なところを読ませられていた。そこにピリポがやって来た。

34 **闇人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』**

自分のことか、あるいは人についてかと。なかなか面白い。今の聖書学者が何のかんのといろんなことを言っているけれども、結論は出てこない。あるいは、

「これはエレミヤのごとき人を思って書いたのではないか」

なんてことを言う人もあるようですが。もちろん、エレミヤの姿の中にはそういった要素がありましたから。

35 **ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。**

なぜ、私は今日ここをちょっと示されたようなことになってしまったかというと、

「聖霊、聖霊」

と言いますけれども、これはどんなにキリストに、この驚くべき霊的人物に直結していても、ヨハネもペテロもヤコブも聖霊を本当に受けることができなかった。イエスにじかじかに接していた一番弟子のペテロもどうにもならない。そのことはキリストはちゃんと見破っておられる。

「今にお前は私を否むぞ。そして、お前たちもやがて私を捨てるであろう。汝らも我を去らんとするか」

と。事実みな、弟子たちはキリストを捨てて散ってしまった。失望落胆と、ある意味において反逆だよな、主を裏切っている。なにもユダに限らないんだ。ユダは裏切りの急先鋒のやつだったけれども、しかし、他の連中もユダ的なものが多少あった。けれども、キリストはもうひとつ先を見ておられた。

「それは無理もない。お前たちには、私が十字架を通らなければ聖霊は来ないんだから。お前たちの信ずると信じないとにかかわらず、贖罪という大事なことを私はしなくてはならない」

と。神さまの側からは救いははっきりと来ている。太陽の光がはっきりと来ているのに、太陽は要らないと言って窓を閉めてしまって、蛍光灯を照らしているようなものだ。そういう蛍光灯の世界ではダメなんです、お天道さまの世界に本当に魂が向けられていなくては。その太陽の光を受ける前にまず、浄化作用をはっきりとしておかなければならない。その救いの根底を神さまははっきりと展開なしたもう。それが十字架である。

「十字架によって完全に、未だ信ぜざるときに、いや敵であったときに、既に救いが来た」

とパウロが言ってます。逆らっているときに既に、キリストの側からはもう救いは与えつ

つある。問題は、

「これを受けるかどうか」

にだけかかっている。恵みは、私たちは物理的な存在でないから、それを受けるか受けないかは我々の側の自由なんです。それを受けないように自由を使っている人がたくさんあるわけだ。私たちの自由は、せっかくいただいた自由というものは、最善のものを受けるために与えている自由なんだ。それを、そうでないことのためにこの自由をたくさん使っている。絶対無条件の恩寵を受ける自由を与えられているんですよ、私たちは。だから、文句なしにこれを受けるだけのはなしなんだ。

その十字架を通らなければ、「聖霊」なんて言っても、この聖霊は来ない。ところが今度は、

「十字架の贖いはありがたい」

と言って、ただ「十字架、十字架」で――十字架を通してその先にこの聖霊を与えよう、この生命を与えなければと言って、使徒行伝の展開をさせようとしていらっしゃるのに――十字架止まりで、福音書の終りでもっておしまいになっている人がたくさんあるわけだ。ところがしかし、それでは実は本当の意味で福音書も読めなくなってしまった。妙なんだね、この今のキリスト教というのは。非常に

「十字架、十字架」

と言ってやっているけれども。しかし、

「キリストは十字架にかかったら当然、復活せざるをえない、昇天せざるを得ない、聖霊を与えざるを得ない」

というように畳みかけて展開しているんですから。

●罪の赦しのバプテスマ

しかし、我々は死に至るまで罪びとにすぎない。十字架を抜きにしては罪びとにすぎない者には、本当に聖霊の世界が自在に深く展開します。十字架を受けることが深ければ深いほど、聖霊を受けることはいよいよ豊かになっていく。この相互関係というか、一体関係をいよいよ私たちは、その点で最も健全な福音の構造を展開している。そうなってきたら、もう何も恐れることはないし、また自分が傲慢になることがない。十字架の前の平伏しがなかったらば、決して本当の展開をしないことは事実が証明している。

ピリポがこのキリストのことを証したときに、我々の罪のためにキリストは十字架にかかり、そして、

「彼らを赦してやってください」

と、実力をもって私たちに赦しを与えた事態を、そこで語ったに相違ない。

36 **途（みち）を進むる程に水ある所に来（きた）りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障（さわ）りかある』** 37（なし） 38 **乃（すなわ）ち命じて馬車を止め、**

ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。

水のバプテスマですが、それが同時に、罪の赦しのバプテスマであります。水のバプテスマ、悔い改めのバプテスマ、罪の赦しのバプテスマを本当に受ければ、これはキリストと同じように聖霊が来るわけです。だから、教会のバプテスマも浸礼をやって、バプテスト教会なんていうのは、川の中につけるわけだな。それはバプテスマを受ける時に十字架を本当に受けなければダメですよ。バプテスマを私はやったことはないけれども。もし、浸礼をなさるとするならば、そこに本当に十字架を受けとらなかったならば、この水のバプテスマは意味をなさない。なぜ、「この世に死ぬか」というと、「死ぬ」というのは、水の中にいて溺れるから死ぬのではないですか。

「われキリストと共に十字架せられたり」

と。キリストの血の水だな。キリストの血潮の水を、血の流れを受けとり、そして、本当に罪がそれによって清められた。「清められた」というのは、

「自我がふっ飛んだ」

ということです。

「この悪い行い、この悪い思い」

とは枝葉にすぎないので、自我が――神さまと本当に平伏して直結できないところの、この我という傲慢な人間――これが砕かれる。

●見えないものを見ている

皆さん、本当に受けとってくださいよ。私は

「無者」

という言葉が好きなんだけれども、あなた方はあまり好きではないかな。いいよ（笑）。無者、修行をしなくては。もう本当に自分が無くなってしまった。普通の若い人は、

「自分が無くなってしまう」

というと、なにか頼りないように思うかしらないけれども、そういうことではない。今、私はこうして何を見ているか分かるかな。窓の外のツツジを見ているのではない。私とツツジの間のものを見ている。それは空気です。この空気を見ている。

「空気は見えますか」

なんてね。見えないものを見ているんです。これは困ってしまったね。見えないものを見ている。ああ、この空気というやつはなんと素晴らしいかと。

「見えないものを見ている」

ということが分かりますか。空気は見えない。それを私は見ているというのはどういうことだろうね。

この空気がなかったならば、一体あのツツジが咲きますかね。咲かないでしょ。このす

がすがしい空気がこの植物を出している。ああ、植物がこんなにきれいに生きているなと。そこには空気――光を含んだ空気ですよ――この太陽の光を含んだ空気が見える。見えないものが見えるとは、そういった緑の葉だとか花を見ている、その現象を見ていると、現象のもうとひとつ奥の世界が見えてくるわけです。そうでしょ。

その見えないものであって、充満していて、他のものを生かしている世界が、ここに言うところの無の世界なんです。即ち、他のものを生かしている見えないものの中に何が充満しているかというと、空気や光が充満している。太陽の光、光熱が。太陽の光熱が充満している空気なんです。太陽の光熱が充満している空気が、

「無にして即無量」

の生命的な空気なんです。私たちを生かしているでしょ。

だから、本当に自我が無くなって、見えない姿になってくると、実はそこには聖霊がくる。

「十字架によって自我というやつがすっ飛んでしまうと、そこにはどうしても聖霊が来ないではいられない」

のです。だから、このペンテコステ以来は、キリストが十字架にかかって、それから始まったから、その「賜りたる無」の世界から「無量なるもの」を――無は十字架で、無量の世界は聖霊の世界ですから――離すことができない。無にならなければ、無量は出てこない。なにかゴタゴタあるところには本当の無量は出てこない。十字架がもう輝くんです、グッーと。

●聖霊の人

そういうことで、水のバプテスマとは、「聖霊のバプテスマ」を受けるわけです。キリストと共に十字架されることがこの水のバプテスマであります。キリストと共に十字架せられたら、どうですか。

39 **彼ら水より上がりしとき、主の霊、**
主の霊がもうちゃんとそこに来ているから。闇人は救われてしまって、
ピリポを取り去りたれば、闇人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。

ピリポはどこかに行ってしまったが、闇人はうれしくてしょうがない。本当に救われてしまったからね。そして、ピリポは驚くべき人ですよ。どこかへ行ってしまった。これはもう物理法則を超えてしまった。私はこの記事を読んで、驚いてしまった。なんという凄い伝道者が――パウロもこのピリポのこの姿にはかなわないかもしれない――ステパノとピリポというこの二人の先駆者がパウロの前にいたことを忘れてはいかん。

だから、本当に聖霊の人となったならば――私たちは今こうやって畳の上に坐ったり立ったりしているけれども――これはもう空中を歩いたり立ったり坐ったり、空中に坐ってい

るような、そういうような境地に自分があることを実感するようになって来なくては。そういうような具合にして、

「キリストの中にあるという者はなんと驚くべき現実であろうか」

と。もうその世界では限りなく深く、そして霊的なはち切れるような現実です。それを受けとって行きます。

８章のピリポの伝道にぶつかって、私たちの、皆さん一人びとりの伝道の姿が、このピリポのようにして――

「読んでも何かわからない」

「はいはい、それでは……」

というわけで――やっていく。そして、あるいは何か自分の持っているものを、「天旅」だの「ハレルヤ」だのをいつもカバンの中に入れて、その「闇人」みたいのにぶつかったら、そこで知らないまに伝道できるようなことに、皆さん一人びとりが――なにもＩ君やＯ君やＫ君に任せておかないで――やってくだいさいよ。しかし、それは、さっきＯ先生が言ったように、若いのがいきなりちょっとただ空元気でやったって、それはだめなんだ。これは本当にその世界に祈り深くなったなら、自然にそうさせられていく。しかし、

「それまでは静かにしてましょう」

なんて、あまりかしこまらなくたっていい。

実際、この祈りの世界で受けとったら、その人その人に相応な証をしていく。そうすると、祈りが本当にまた消化されていく。やはり、受けることと与えることが相互関係で進んで行くようにしていけば、限りなく与えられていく。ただしまっていると、よどんでしまうから。しまっているのではなくて、それは深めるために受けとることはいいけれども、しまっているような在り方をしていたらダメですよね。

諸々の偽りの宗教や何かに対する、この福音のはっきりした角度。それから、我々の在り方として、どこまでも十字架の受け方は、イザヤ書53章を本当に受けとる。そこならば聖霊は豊かに来るということを、我々の信仰の構造としてはっきりと自覚する。これは皆さんは私から耳にたこができるほどに聞いているけれども、しかし、普通はおそらく教会なんかにいらっしゃっても、そこのところははっきりと言われているのかどうか私は知りませんよ。ですから、あなた方は本当にそこのところをしっかり自覚してやってください。

私は正直、無教会にいたときに十字架はさんざん聞いたけれども、聖霊のことをそれだけの構造において聞かないのだから。その点で無教会には確かに限界があった。我々の歴史的な使命というものははっきりあるのですから、その歴史的な使命を担わされているあなた方は――勉強も大いにやってください。何でも大いにやってください。しかし――この福音書を、この聖書を本当にいつも中心にして、何をやってもこれから不思議な智慧が湧いてくるし、また力が出てくるし、創造的な人になってきますから。そういう意味にお

いて、聖書は本当にくらってください。聖書がいかに聖霊の言葉であるかと。

「わが言は霊なり生命なり」

という、いかに聖霊の言であるかということを、いよいよ深く身につけていただきたい。

この聖霊の言であるということを身につけるには、もちろん祈り心で読むことです。そのときには、一度にそんなにたくさん読むことはないから。毎日お読みになるときに、その中に本当に自分の生命を没入し――祈ることもやはり命懸けです、生命を懸けて読むんです――そして、生命が来るまで読む。生命を懸けて読んで、それを読んでいて生命が来て、もう読むことが直ちに祈りの世界に入ってしまう。読みつつ祈りの世界に入ってしまう。その文字自身を読むことが直ちに祈りである。そういう読み方になっていただきたいわけです。そうしたら、我々はもうどこを読みましても、必ずそこから新しい光がくるし、創造的なものが与えられて、楽しくてしょうがない。だから、ご飯を食べるよりか力が出てくる。私は始めはちょっと喉がおかしかったけれども、もう今は全然おかしくない。そういうわけで、皆さんが特に使徒行伝の8章のところを、普通はちょっとあまり顧みられていないピリポさんのところに今日は来たかったわけです。そしてその前に、本当に血を流した殉教のステパノがまず第一の、身をもってしたパウロの導き手であった。

●血染めの聖教

それから、ひとつ不思議なお話がある。

「血染めの聖教（しょうぎょう）」

という。これは蓮如上人という浄土真宗の坊さんがいますが、そのお弟子に本光坊了顕（ほんこうぼうりょうけん）というのがいる。これは加賀と越前の国境に吉崎という所があるそうです。これは日本海に面している。山の上にひとつの坊舎を立てて、蓮如上人は吉崎という所の山小屋を浄土真宗の伝道の根拠としていた。蓮如上人は本願寺の第八代の坊さんで、越前の国主の朝倉孝景なども彼から教えを聞いたそうですが、文明6年3月14日に、ちょうど日が暮れた頃らしいが、南の門から火が出て、この大事な建物が延焼してしまった。このお寺に開山の聖人であるところの御神筆の聖教があった。蓮如はそのことを思い出して――親鸞のものでしょ――

「あれを火の中に取り残してしまった！」

ということをつい口走った。そのお弟子さんの本光坊（本向坊）走って行った。他の弟子が、

「危ない、危ない。そんな方へ行ったら、火で焼け死んでしまうぞ」

と言ったけれども、彼は聞かない。そして、火の中に飛び込んで行った。袖が切れるようにして引き止めたけれども、火の中に飛び込んでしまった。そうすると、本光坊は、

「如来大悲の御徳は、身を粉にしてもこれに報じなければならない。自分は身を粉にしてもその如来の大悲にお応えしなければならない」

と。これは親鸞の和讃の一節なんだそうですが、

「如来大悲の御徳は身を粉にしても報ずべき」

という言葉は親鸞の言葉なんだそうですが。そして、火の中に突進して行きました。自分の被ったところの恩寵に対して、骨を砕いてもこれに感謝しなければならないと言って、火をものともせずして、その神筆を取りに、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と称えながら入って行った。そうしたらば、ついに全部燃えてしまった。その燃えた中からその死骸が黒こげになって現われてきた。

「とうとう、その御神筆の聖教も灰になってしまったか」

と。しかし、その坊さんの行為に対しては非常に皆は感動していた。そして、その本光坊の焼け死体を見て、彦左衛門は

「腹を裂いて死んだと見える」

と言ったそうですが、その本光坊の右手には短刀があった。そして、その死体を調べてみたら、その短刀で自分の身体を切って、その取り出してきたところのその御神筆の巻物を身体の中に隠した。それで、身は焦げたけれども、血に染まった聖教がその身体の中から現われたという。それで蓮如上人にこれを渡した。それがその「血染めの聖教」だということを、私はどこかで読んだんですが。

仏の教えをかくのごとくにして、親鸞の神筆を大事に、そのためには身を捨ててもこれを守ろうとした。しかも、それは火の中に飛び込んだばかりではなくて、自分の身体を裂いてその中に入れたという、まずこの行為には驚くべき殉教の気魄がある。ヨーロッパの殉教史にも実に素晴らしいものがありますが。私たちは福音のためには、昨日から私たちが学んでいるこの十字架道という、身を捨てて、捨身の体勢でもってこの福音を守る。なにも聖書をどうということではないですが、私たち自身が本当にこの聖書の不立文字として、活ける文字として、

「汝らはキリストの書（ふみ）なり」

という、我々自身がこのキリストの書として水火をも恐れずして進んで行く。

●人を救わんがために救われている

これはイザヤ書43章にも出てますが、1節から7節までは非常に大事なところのひとつです。

「1ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有（もの）なり。

「おそるるなかれ、我なんじをこの十字架によって贖った。我なんじの名をよべり。

汝はわが有（もの）である」

と。私たちは本当に一人びとりが神のものである。キリストのものである。

2なんじ水の中をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過るときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火の中をゆくとき焚（やか）るることなく火焔（ほのお）もまた燃えつかじ。

と、恐ろしいことが書いてある。水も分かたれて進んで行く。火も燃えつかないような霊的な力を与えられている。カトリックの世界でもそういう話がある。十字架につけられて火で燃やされても、俄然、天から雨が降ってきてその火を消してしまったということもあるわけです。

3我はエホバなんじの神イスラエルの聖者なんじの救主（すくいぬし）なり。われエジプトを予（あた）えてなんじの贖代（あがないしろ）となし、エテオピアとセバとをなんじに代（か）う。4われ看（み）てなんじを宝とし尊きものとし亦なんじを愛す。この故にわれ人をもて汝にかえ、民をなんじの命にかえん。

というのはまぁ旧約的な言葉ですけれども。

5懼るるなかれ我なんじとともにあり、我なんじの裔（すえ）を東よりきたらせ西より汝をあつむべし。6われ北にむかいて釈（ゆる）せといい南にむかいて留むるなかれといわん。わが子輩（こら）を遠きよりきたらせ、わが女（むすめ）らを地の極（はて）よりきたらせよ。7すべてわが名をもて称えらるる者をきたらせよ、我かれらをわが栄光のために創造せり。われ曩（さき）にこれを造りかつ成しおわれり。」（イザヤ43・1～7）

そのように東西南北から神の民が集められる。

「我こそはイスラエルの本流であるなんて思っていると、御国の子らは嘆き歯噛みすることあらん。ただアブラハムの直系であるなんてことを血筋のうえで誇ってもダメだ。逆にお前たちには天国の門は閉ざされて、異邦人が逆に救われてしまうぞ」

というようなことをキリストがしばしば言われましたが、私たちも、

「クリスチャンだからいい」

なんてことではひとつもない。レッテル・クリスチャンでは何にもならない。「キリスト」の「キ」の字も知らない人が天国に入っていく。福音を受けたら、本当に福音を受けた者らしく証していくわけなんだと。これはなにも自分たちが救われんがためではない。人を救わんがために私たちは救われている。

我々がもし、あなた方がもし、生涯を通して本当に一人も救わなかったら、どんなに立派な祈りができようが、聖書を知っていようが、

「どっこい、待ってください」

と、天国の門のところで言われる。

「わが福音を受けて、これを行う者、御意を行う者、これが天国に入る」

とキリストは言われる。羊と山羊とを分けたときに、

「水一杯を本当に渇ける者にやったか。これは即ち、我になしたるなり」

と。今年の夏はヤコブ書をやりますけれども、いわゆる言葉の世界ではない。もう、言と行とが本当に一つの証の世界です。キリストを受けた者がキリストを証しなかったら、受けているとは言えないとはっきり言うだけの世界です。

もう、私は

「今までの無教会の信仰ではダメだ」

ということがはっきりわかるんです。パウロが「信仰のみ」と言ったから、

「信仰のみの信仰」

と言ってこれをすっかりお題目にしてしまっている。それなら、「信仰のみ」と言ったパウロが何という素晴らしい行者ではないですか。これほどの凄い行者はいない。そのパウロが「信仰のみ」と言ったのは、この「信仰のみ」とはどういうことか。無教会は何を「信仰のみ」なんて言っているかと逆に言いたいわけです。

我々が

「使徒的信仰」

と言うならば、私は何とかして、人にこの福音を、この喜びの世界を与えていこうということが白熱的に展開していくような、そういう群であることを願う。これはもう、今の日本の精神的に没落しつつあるところの事態において、さんざん物質的なものが渦巻いている世界において、いい加減なキリスト教では、福音ではとうてい乗り切れるものではない。しかし、この使徒的信仰を本当に実践していくならば、必ずこれは勝っていきます。はっきり勝っていきます。これはひとつも恐れることはない。私はそのことを多少は自分で経験して、そのことははっきり言えますから。

●神の霊の響き

そういうわけで、皆さんも、もう無碍（むげ）の一道、前進あるのみ。それには本当にキリストの勝利が約束されている。神の栄光が現われていく。そして、それが行けば行くほどいよいよ、何だかしらないけれども、豊かなる生命が溢れて仕方がない。また、本当に喜びで、くすぶりが全然なくなるような人になっていく。治らないと思っていた病気もすっ飛ばしてしまう。もう心配はいらんよ。その代わり、

「キリストを信じる」

というのは、この驚くべき生命のキリストを――「受けとる」ことが「信ずる」ことなんだから――本当に受けとる。

「あなたが私を本当に力付けなければ、私はこの祈りをやめるわけにいきません」

と言って、祈りかかるような祈りをしていかなくては。また、ある人のためには本当にそのようにして一晩中、追求してその人のために祈るということもあるでしょう。そういうことをとにかく一回でなくて何日も――親鸞は百日かけて祈ったではないですか。それで法然に遇う機会を与えられたではないですか。それが百日でなくて、一年かかるか二年かかる知らんよ――とにかく、絶対に不屈の神の勝利を持ちながら、生涯を祈りぬく。

そういうことで私たちは進んで行けば、なるほど、使徒行伝の先を私たちが本当に行じていく。使徒行伝の先を文字で書くのではなくて、生涯をもって書いていく。天界にそれは記されていくという、天に映るところ文字をもって進んで行こうというわけです。

「血染めの聖教」の話をしましたが、日本の昔にはそれだけの信者がいた。いわんや、この福音を受けた者はそうでなくては。いや、カトリックのあの長崎のあたりに現われたところの昔の殉教者にはそういう魂があったでしょう。なにしろ、ザビエルなんていうのは凄い坊さんですよ。私はザビエルの伝記の詳しいものを読みたいと思っているけれども。それはカトリックだからどうだなんて、そんなくだらないことはもう全然なくなってしまった。ザビエルの語る言葉がもちろん日本人には分からない。けれども、その言葉が発するところの気魄、響きでもって受けとってしまう。だから、そこで回心が起きてしまうわけです。

どうぞ、そのようなことで、人間の魂は本当に言葉の奥の言葉、本当の神の霊の響きを受けとらなくては。

「わが言は霊なり生命なり」

とキリストが言われたのは、この聖書を読みながら、「霊なり生命なり」が――

「眼光紙背に徹する」

というが――この文字の奥からキリストの「霊なり生命なり」が言の暗号としてグーッと迫ってくる読み方をすることが、集会よりもはるかに大事なことです。そういう読み方が皆さんができるようになったら、そうしたらこれは本ものになる。どうぞ、そういうことを自分でもって実践し、そして、深く――どうも、都会の生活はすぐ時間のことを気にするんだけれども――時間なんかは超越した夜の祈りの世界に入る。そうすると、眠いと思ったのが今度は、それが覚めてしまう。そういうことがもちろんある。

どうぞ、そういうことで、私たちは今日のペンテコステは割合に地味なペンテコステですが、滋味が深い世界に深く入って行きたいと思っています。